青森県総合学校教育センター　研究紀要　[2012.3]
Ｅ３－０３

中学校　学級経営

中学生の学校生活への適応感とキャリア意識との関連性の研究
－人間関係づくりを軸としたＳＧＥのプログラムの実践を通して－

教育相談課　　研究員　　番　場　　亜　由　美

要　　旨

中学生を対象に，人間関係づくりに重点をおいた構成的グループエンカウンター（SGE ）を実施し，学校生活への適応感とキャリア意識との関連性を検証した。その結果，「人間関係形成」と「友人関係」において，特に有意な向上が認められた。また，キャリア意識の４下位尺度は学校適応感の４下位尺度と有意な正の相関を示した。これにより，キャリア教育によって生徒のキャリア意識が高まると，学校生活への適応感も向上することにつながる可能性が示唆された。

キーワード：中学校　キャリア教育　学校不適応　構成的グループエンカウンター（SGE ）
人間関係づくり

Ⅰ　主題設定の理由

文部科学省が発表した「平成22年度　児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」（2012）で，平成22年度の全国における不登校者数は，小学校で約２万２千人，中学校で約９万７千人であり，小学校では 311人に１人（0.32%），中学校では37人に１人（2.73%）の割合で，不登校児童生徒が存在することが明らかにされた。学年別では，小・中学校ともに学年が進むにつれて多くなっており，特に「中１ギャップ」という言葉に表されるように，小学校６年生から中学校１年生にかけて大幅な増加が見られる。

また，中央教育審議会は「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」（2008）の中で，「子どもの心と体の状況」において，日本の子どもたちが，今までにない難しさを内包しているとして，①小１プロブレムや学級崩壊などに見られるような自制心や規範意識の希薄化，生活習慣の確立が不十分であることや問題行動など，子どもたちの心と体の状況に課題は少なくない。②自分に自信がある子どもの割合が，他の国と比較して少ない。③学習や将来の生活に対して無気力であったり，不安を感じたりしている子どもが増加している。④友達や仲間のことで悩む子どもが増えるなど人間関係の形成が困難かつ不得手になっている，の４点を示している。

こうした中，文部科学省は『小学校キャリア教育の手引き』（2010）の中で，キャリア教育の充実が，学習意欲を高め，学校への不適応を減らし，子どもたちの自立を促す一助になるとして，キャリア教育の一層の必要性を提言しているが，同様のことが中学校においても当てはまると言える。

筆者のこれまでの勤務校においても，多様な集団でのコミュニケーション能力が低く，人間関係を築きにくい生徒が多いという実態が見られたことから，集団や学校生活への適応の在り方をキャリア教育という観点から問い直す必要があると考えた。

本研究では，学級としての集団を生かし，生徒同士の人間関係を構築するために，構成的グループエンカウンター（以下，「SGE 」という。)のプログラムを実践した。SGE は，人間関係づくりの能力が向上するという集団への効果と，一人一人の成長を支援するという個への効果がある。そのため，SGE の手法を用いることによって，人間関係を促進したり，他者との関わりを通して自己理解や生き方への考察を深めることができると考える。その結果，生徒のキャリア意識が高まると，学校生活への適応感も向上することと，その関連性を明らかにするために，本研究主題を設定した。

Ⅱ　研究目標

中学校において，生徒の学校生活への適応感とキャリア意識との関連性を，人間関係づくりに重点をおいたSGE のプログラム（以下，「プログラム」という。)の実践を通して明らかにする。

Ⅲ　研究仮説

中学校において，人間関係づくりに重点をおいたプログラムを取り入れることによって生徒のキャリア意識と学校生活への適応感が向上するとともに，それらの関連性が明らかになるであろう。

Ⅳ　研究の実際とその考察

１　「学校不適応」について

(1) 学校不適応の現状と課題

文部科学省は「学校不適応対策調査研究協力者会議報告」（概要）（1992）において，学校が不登校問題に対応するに当たって，児童生徒の学校生活への適応を図ると同時に，その自立をいかに促すかという視点をもって指導することが重要であると述べている。

図１に示すのは，当センターにおける中学生の不登校相談件数の推移である。

平成18年度に件数が一旦減少するものの，翌19年度には急増している。また，それ以降，来所相談は減少しているが，電話相談は上昇傾向が続いている。ここで言う不登校とは，相談受理時に登校できていない状態を指しており，登校することができたとしても，学級に入れず保健室や相談室などの別室にいる生徒は，集団不適応として扱われている。

平成18年度以前は，この集団不適応による相談が高い割合を占めていたが，同年を境に，不登校による相談が急増している。つまり，集団不適応から不登校へと移行した可能性も考えられるということである。

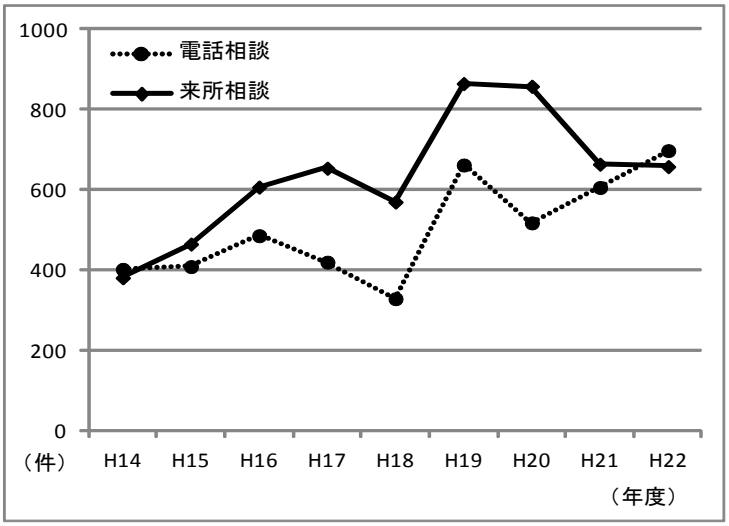

図１　当センターにおける中学生の不登校相談件数の推移

そこで，不登校問題を考える上で，集団不適応の対策を切り離すことはできないと考える。

(2) 本研究における学校不適応

『中学校学習指導要領解説　特別活動編』（2008）は，第３章第１節－１「学級活動の目標」の中で，学級活動が，生徒の学級や学校生活への適応，望ましい人間関係の形成などに資する活動であることを述べ，生徒の学校生活への適応とその充実・向上を図ることが必要であるとしている。

この記述から，学校不適応は，全ての発達段階で起きる可能性が大きいため，まず学級生活の中に居場所を見いだすことが，解決の第一歩になるのではないかと考えた。そこで，生徒が学級集団への帰属意識を高め，学級のメンバーの一人として存在を認められ，集団に所属することを望んでいる状態を学級への適応として捉えることにした。

そして，本研究では学校不適応を「生徒の登校意欲の有無に拘わらず，いじめ・不登校・引きこもり・学業不振などの理由から，生徒が学校生活に適応できないこと」とした。

２　「キャリア教育」について

(1) キャリア発達にかかわる諸能力

中央教育審議会は『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）』（2011）の中で，キャリア発達とは「社会の中で自分の役割を果たしながら，自分らしい生き方を実現していく過程である」と述べている。人の成長の過程には，節目となる発達の段階があり，それぞれの発達段階において，克服あるいは達成すべき課題がある。キャリア教育は，そのような一人一人のキャリア発達を支援するものでなければならないとしている。

国立教育政策研究所生徒指導研究センター（2002）が提示し，これまでキャリア教育実践の基盤とされてきた「キャリア発達にかかわる諸能力（例）」４領域８能力については，いくつかの課題が指摘されて

きた。例えば，高等学校までの想定にとどまっているため，生涯を通じて育成されるという観点が薄く，社会人として求められる能力との共通言語になっていない。また，提示されている能力は例示にもかかわらず学校現場では，固定的に捉えられている場合が多いことなどである。

中央教育審議会は，これらの問題を克服するために，改めて分析を加え，図２に示す「基礎的・汎用的能力」として再構成して提示した。図２からも分かるように，「基礎的・汎用的能力」は，「４領域８能力」を継承しつつ，学校課題を踏まえた具体的な能力を設定するための参考として提示されている。

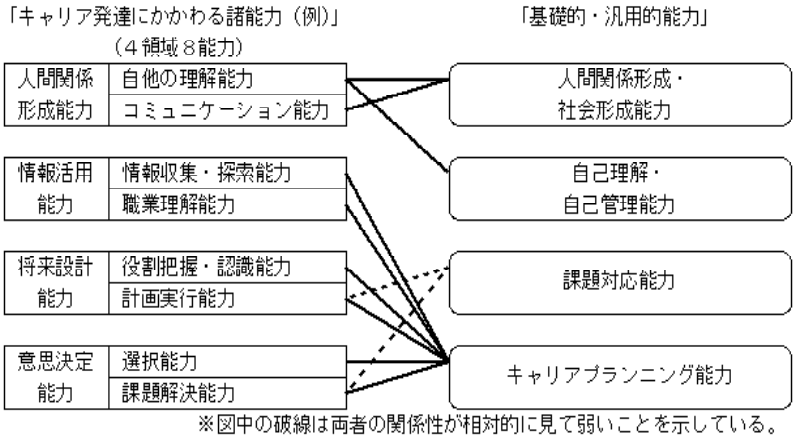

図２　「４領域８能力」と「基礎的・汎用的能力」との相互関係
（『中学校キャリア教育の手引き』2011）

(2) キャリア意識の定義

現在学校では「４領域８能力」に基づき，児童生徒の特徴や地域性などを考慮しながら，キャリア教育を立案・実践している。

しかし，新見・前田（2009）は，キャリア教育の効果を十分に評価するに至っていないのが現状であるとして，その効果を評価するために量的な評価の必要性を主張した。そして，キャリア意識を「キャリア発達にかかわる基礎的な意欲・態度・能力に対する個人の自己評価」と定義した。本研究では，このキャリア意識の定義に基づいて検証を行うこととする。

３　検証尺度について

(1) キャリア意識尺度について

新見（2008）が，中学生を対象に作成し，一定の信頼性と妥当性を確認した「中学生版キャリア意識尺度」を使用した。これは，国立教育政策研究所生徒指導研究センター（2002）が提示した「４領域８能力」に沿って，４下位尺度27項目（人間関係形成９項目，情報活用５項目，将来設計６項目，意思決定７項目）で構成されており，各項目内容に対して，６件法で回答を求めるものとなっている。検証授業実施前は，プログラム作成のための資料として，実施後は，学級のキャリア意識の変容を見るために使用した。

(2) 学校適応感尺度について

多面的な学校適応感の主要部分を押さえ，かつ短時間で実施できるように石田（2009）の「学校適応感尺度」を使用した。この検証尺度は，「友人関係」「学習関係」「学校全体」「教師関係」の４下位尺度16項目で構成されており，「友人関係」とは，友人に対する親密感や満足感，「学習関係」とは，学業に対する関心意欲や授業に対する満足感，「学校全体」とは，学校への帰属意識や満足感，「教師関係」とは，教師に対する信頼感や満足感を，それぞれ問う項目である。また，各項目内容に対して，５件法で回答を求めるものとなっている。検証授業の前後に実施し，学級の学校適応感の変容を比較検討し，さらにキャリア意識と学校適応感の関連性を見るために使用した。

４　プログラムの実際

(1) キャリア意識を高めるためにSGE を用いる理由

國分（2004）は，SGE について，自らの生き方・在り方を考え，未来像を描くなどの活動を通して，目標に向かい努力する心を育てるとしている。キャリア教育が，生き方を考えさせることを目標にしていることから，キャリア発達能力の育成とSGE のねらいとは関連があると考える。特に，シェアリングは生徒自身が，自分の気付きや感情を明確化し，他の人と考えを共有することに活用できるため，自他理解を深める効果があると考える。

また，心身ともに成長の変化が著しい中学生は，内面の揺れが大きい不安定な時期である。この時期は自分を見つめ直し将来への展望を広げる大きな転機となる場合がある。このことから，中学生のキャリア

意識を高めるために，生徒の発達段階を考慮して，その援助となり得るエクササイズを計画的に授業に組み入れることで，より効果的な指導が行われると考える。

以上のことから，キャリア意識を高めるためにSGE の手法を用いることにした。

(2) 検証対象者の抽出

研究協力校の第２学年５学級（男子80名，女子90名，計 170名）を対象に，キャリア意識と学校適応感の実態を把握するために事前テストを行った。回答の平均値を分散分析で比較したところ，キャリア意識の二つの下位尺度において，有意差が認められた。

まず，「人間関係形成」において，学級Ａ～Ｅで比較したところ，学級Ａと他の４学級との間に５％水準で有意差が認められた。また，「将来設計」において，学級Ｂと他の４学級との間に５％水準で有意差が認められた。これらの結果より，５学級のうち有意差が認められた学級ＡとＢの２学級を検証対象学級として抽出した。

(3) 検証授業の実施時期・対象

ア　実施時期：平成23年８月～９月（１学級３時間ずつ）

イ　対　　象：研究協力校　第２学年　２学級（男子32名，女子36名，計68名）

ウ　指導時間：学級活動の時間

(4) プログラムの構成

先行研究では，年間を通した長期的な取組が数多く報告されているが，本研究では短期間に集中して実施できるように，プログラムの回数を，表１に示す全３回の設定にした。

中学校段階の発達課題を考えると，人間関係が広がり，自分の責任や自覚が芽生え始める時期であることや，様々な葛藤や経験の中で自分の生き方を模索し，夢や希望をもつ時期である。そこで，このことを踏まえた上で，実施に当たっては，プログラム構成の重点を人間関係づくりにおくことにした。そして，自分や他者への気付きをより深めるために，SGE を活用することにした。

また，グループ活動を通しての相互作用により，生徒が体験的に人間関係を学び，より良い人間として自ら成長していくことをねらいとした。

さらに，キャリア意識を高めるために，将来の夢や目標，職業に関連したエクササイズを意図的にプログラムに取り入れるように配慮した。

表１　検証授業におけるプログラム

回	月日	プログラム名	ねらい	育てたいキャリア発達能力(◇)とSGE のねらい (☆)
第１回	8／26（金）	「みんな違って みんないい！」	ジャガイモをじっくりと観察し，みんなで意見を交換することで，それぞれの個性や価値観の違いに気付く。	【自他の理解能力】◇ 【コミュニケーション能力】◇ 【自己理解・他者理解】☆ 【感受性の促進】☆
第２回	9／2（金）	「ボクもワタシも ハローワーカー」	将来の職業について考え合う活動を通して，相互理解を深めるとともに，将来のことや職業への興味・関心をもてるようにする。	【自他の理解能力】◇ 【コミュニケーション能力】◇ 【選択能力】◇ 【課題解決能力】◇ 【自己受容】☆ 【自己開示】☆
第３回	9／9（金）	「重役会議」	架空会社の重役という立場で意見交換を行うことで，将来必要とされる資質や能力に気付き，自分の生き方を前向きに考えるきっかけにする。	【自他の理解能力】◇ 【コミュニケーション能力】◇ 【職業理解能力】◇ 【役割把握・認識能力】◇ 【自己主張】☆ 【役割遂行】☆

５　キャリア意識尺度と学校適応感尺度の分析結果と考察

(1) 下位尺度ごとの t 検定分析結果と考察

学級ＡとＢにおいて，全３回のプログラム終了後，それぞれ事後テストを行った。表２は，２学級を合わせた下位尺度ごとの平均値を t 検定で比較し，プログラムの効果を測定した結果である。

全ての下位尺度において，数値の上昇が見られたが，特にキャリ

表２　キャリア意識尺度と学校適応感尺度の t 検定結果

		人数	事前平均(*SD*)	事後平均(*SD*)	*t*値
キャリア意識	人間関係形成	65	4.35(0.67)	4.74(0.39)	7.56**
	情報活用	65	4.32(0.97)	4.58(0.58)	3.53**
	将来設計	65	4.48(0.81)	4.74(0.54)	3.94**
	意思決定	65	4.37(0.92)	4.57(0.53)	2.34*
学校適応感	友人関係	65	3.97(0.62)	4.25(0.35)	5.48**
	学習関係	65	3.18(0.75)	3.35(0.49)	2.93**
	学校全体	65	3.39(0.86)	3.66(0.50)	3.92**
	教師関係	65	3.16(0.79)	3.43(0.39)	3.61**

(**$p<.01$　*$p<.05$)

ア意識尺度は「人間関係形成」「情報活用」「将来設計」において，１％水準で有意な向上が認められ，「意思決定」においては，５％水準で有意な向上が認められた。また，学校適応感尺度は，四つの下位尺度全てにおいて，１％水準で有意な向上が認められた。これらの分析結果から，プログラムの効果が得られたものと考えられる。

(2) 項目ごとの *t* 検定分析結果と考察

表３は，キャリア意識尺度の項目ごとの事前テストと事後テストの平均値を *t* 検定で比較し，プログラムの効果を測定した結果である。

四つの下位尺度27項目中14項目において，有意な向上が認められた。特に，Ａ１～９の「人間関係形成」の質問項目に数値の高いものが多く見られることから意識の変容がうかがえる。これは，自他の理解能力やコミュニケーション能力などの人間関係に重点をおいたプログラムのねらいが，達成されたことの表れではないかと推測される。

また，質問項目Ａ８の「自分の気持ちや考えを友だちにわかりやすく伝えることができると思う」については，事前と事後で有意な数値の上昇（両側検定：$t(64)=6.46, p<.01$）が認められた。これはSGE を通して，考えの共有を図る場面が効果的に活用されたからではないかと推測される。

同様に表４は，学校適応感尺度の項目ごとの平均値を *t* 検定で比較した結果である。

四つの下位尺度16項目中９項目で有意な向上が認められた。特にＡ１～４の「友人関係」の質問項目に数値の高いものが多く見られることから意識の変容がうかがえる。これは，友人関係において，親密感や満足感を得ていることの表れではないかと推測される。

また，質問項目Ｃ１の「この学校の生徒であることをほこりに思う」については，事前と事後で，有意な数値の上昇（両側検定：$t(64)=4.91, p<.01$）が認められた。事前の数値が低かったのに対し，事後は数値の上昇が見られたことから，学校に対する帰属意識や満足感が高まったと推測される。

そして，質問項目Ａ３の「この学校の友だちといっしょにいると楽しい」と，Ｂ１の「この学校の授業をうけるのは楽しい」の２項目で，わずかに数値の下降が見られたが，どちらも事前テストの平均値が充分に高かったこともあり，意識の変容を問題にする必要はないものと考える。

表３　キャリア意識尺度の項目ごとの *t* 検定結果

	事前平均(*SD*)	事後平均(*SD*)	*t* 値
A1 友だちのよいところをもっと知りたいと思う	4.77(1.07)	4.92(0.80)	1.74
A2 友だちが困ったときには、助けることができると思う	4.63(0.86)	4.89(0.64)	3.72**
A3 友だちの気持ちを大切にすることができると思う	4.54(0.92)	4.97(0.66)	5.46**
A4 自分がいやなことは、友だちにはっきり言うべきだと思う	4.62(1.30)	4.63(0.86)	0.14
A5 友だちのよくないところは注意すべきだと思う	4.40(1.13)	4.55(0.77)	1.43
A6 ふざけて友だちをからかわないようにしたいと思う	4.42(1.20)	4.88(0.72)	4.82**
A7 違う学年の人とも話をしたいと思う	3.77(1.67)	4.52(0.89)	4.40**
A8 自分の気持ちや考えを友だちにわかりやすく伝えることができると思う	3.43(0.95)	4.12(0.76)	6.46**
A9 友だちに悪いことをしたと思ったら謝ることができると思う	4.55(1.05)	5.15(0.69)	6.00**
B1 高校ではどんな勉強をするのか知りたいと思う	4.49(1.53)	4.78(0.94)	2.45*
B2 わからないことは、先生や友だちに聞くことができると思う	4.32(1.29)	4.23(0.84)	0.75
B3 調べたことを人にわかりやすく発表することができると思う	3.32(1.29)	3.78(0.84)	3.84**
B4 働いている人はどのようにして、その職場についたのかを知りたいと思う	4.46(1.38)	4.95(0.84)	3.96**
B5 学級の係や当番の仕事は、きちんとやることが大切だと思う	5.00(1.02)	5.15(0.81)	2.09*
C1 そうじや係の仕事は自分がしなくても他の人がしてくれると思う●	4.11(1.16)	4.69(0.68)	4.39**
C2 みんなで決めた係や仕事は、きちんとやりたいと思う	4.86(1.18)	5.15(0.83)	2.74**
C3 やる気になったら、家のそうじや手伝いができると思う	4.83(1.32)	4.80(0.96)	0.27
C4 子どもは、将来のためにしっかりと勉強すべきだと思う	4.38(1.14)	4.86(0.88)	4.26**
C5 計画や時間を決めて勉強したいと思う	3.95(1.22)	4.08(0.87)	1.02
C6 やる気になったら、集中して勉強することができると思う	4.74(1.14)	4.83(0.91)	0.81
D1 何でも最後は自分で決めたいと思う	4.52(1.19)	4.63(0.82)	0.91
D2 みんなと意見が違っても、自分の意見を言うことができると思う	3.63(1.45)	4.00(0.79)	1.94
D3 すぐにできなくても、できるまでがんばろうと思う	4.42(1.25)	4.63(0.89)	1.72
D4 失敗しても、あきらめずに、うまくいくまでがんばろうと思う	4.42(1.30)	4.65(0.89)	1.96
D5 友だちとけんかしても、うまく仲直りができると思う	4.25(1.09)	4.31(0.77)	0.44
D6 難しいことでも、やる気になったら、できると思う	4.46(1.32)	4.65(0.98)	1.43
D7 自分のしたことには自分で責任をもつことが大切だと思う	4.91(1.03)	5.11(0.81)	2.51*

●逆転項目　　(**$p<.01$　*$p<.05$)

表４　学校適応感尺度の項目ごとの *t* 検定結果

	事前平均(*SD*)	事後平均(*SD*)	*t* 値
A1 この学校には、よい友だちがたくさんいると思う	4.22(0.80)	4.46(0.56)	2.90**
A2 この学校の友だちとの関係に不満がある●	3.37(1.15)	3.97(0.61)	4.71**
A3 この学校の友だちといっしょにいると楽しい	4.55(0.69)	4.51(0.53)	0.73
A4 この学校の友だちとは何でも話すことができると思う	3.75(1.00)	4.08(0.67)	3.67**
B1 この学校の授業をうけるのは楽しい	3.40(0.97)	3.38(0.65)	0.16
B2 この学校の授業はつまらないと思う●	3.11(1.00)	3.29(0.76)	1.84
B3 この学校の授業ではやる気がわいてくる	2.88(0.76)	2.98(0.60)	1.41
B4 この学校ではいっしょうけんめい授業をうけたいと思う	3.32(1.02)	3.75(0.71)	4.64**
C1 この学校の生徒であることをほこりに思う	3.29(1.00)	3.71(0.74)	4.91**
C2 この学校の生徒であることがうれしい	3.40(0.97)	3.52(0.66)	1.38
C3 この学校の生徒であることを、強く意識している	3.31(0.97)	3.54(0.71)	2.37*
C4 この学校を離れるとしたら、とてもつらいと思う	3.55(1.23)	3.88(0.72)	3.00**
D1 この学校の先生に対して不満がある●	3.42(1.04)	3.52(0.64)	1.00
D2 この学校の先生には安心して何でも相談できると思う	2.74(1.09)	3.22(0.48)	4.26**
D3 この学校では先生と気軽に話ができると思う	3.43(1.07)	3.54(0.64)	1.02
D4 この学校の先生に対して親しみを感じる	3.05(1.07)	3.46(0.56)	3.52**

●逆転項目　　(**$p<.01$　*$p<.05$)

(3) 相関分析結果と考察

キャリア意識尺度の４下位尺度と，学校適応感尺度の４下位尺度との関連を分析するために，「人間関係形成」「情報活用」「将来設計」「意思決定」「友人関係」「学習関係」「学校全体」「教師関係」の八つの得点間でPearsonの相関係数を算出した（表５）。その結果，キャリア意識尺度の４下位尺度は，いずれも学校適応感尺度の４下位尺度との間に有意な正の相関を示した。

表５　キャリア意識尺度と学校適応感尺度の相関分析結果

	キャリア意識				学校適応感			
	人間	情報	将来	意思	友人	学習	学校	教師
キャリア意識								
人間関係形成	－	.52**	.55**	.64**	.24	.50**	.53**	.28*
情報活用		－	.62**	.67**	.36**	.60**	.66**	.30*
将来設計			－	.63**	.22	.68**	.62**	.40**
意思決定				－	.36**	.49**	.62**	.27*
学校適応感								
友人関係					－	.47**	.42**	.41**
学習関係						－	.69**	.62**
学校全体							－	.48**
教師関係								－

(**$p<.01$　*$p<.05$)

特に，学校適応感尺度の「学習関係」と「学校全体」は，キャリア意識尺度と比較的強い相関が認められた。これは，本研究のプログラムが，進路や将来の生き方について考えさせる内容であったことが影響していると考えられる。その中でも，数値が高いものが，「将来設計」と「学習関係」との相関である。自分の目標とすべき将来の生き方や進路を考える力が高いことは，学習に対する意欲も大きいことがうかがえる。同様に，「情報活用」と「学習関係」に関しては，進路や職業に関する情報を収集し活用する力が高いことは，様々な体験などを通して，学校で学ぶことの必要性や大切さに気付く力が大きいことがうかがえる。

また，「情報活用」「将来設計」「意思決定」は，「学校全体」と比較的強い相関が認められた。つまり，学校に自分の居場所があるという所属感が，集団から自分の存在を認められていることにつながると推測される。これは，生徒が学校生活に適応している状態と考えられる。

(4) 振り返りシートの分散分析結果と考察

全３回のプログラムにおいて，授業後，生徒たちに振り返りシートを記入させ，シェアリングを行った。

振り返りシートは，プログラムごとに生徒の意識の変容を見るために，４件法で回答を求める共通質問と，授業の感想を記入する自由記述欄から構成されている。

図３は，５問の共通質問の授業ごとの平均点の推移である。授業の回を重ねるごとに，数値が向上し回答が肯定的になっている。

この全３回の平均点のデータに関して，分散分析を行った結果，Ｑ２の「今日の活動はためになった」の質問項目で，有意な数値の上昇$F(2,188)=9.25, p<.01$ が認められた。そこで，これをTukey のHSD 検定にかけた結果，授業の１回目と３回目には１％水準で有意な向上が認められ，２回目と３回目には５％水準で有意な向上が認

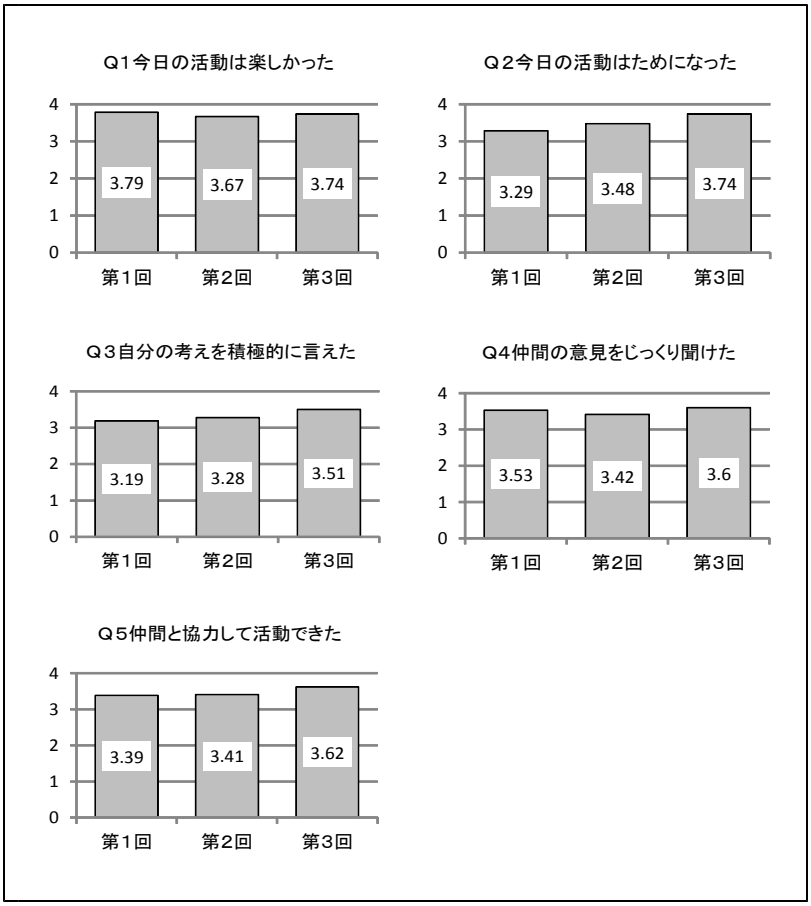

図３　振り返りシートの共通質問における平均点の推移（全５問）

められた。このことから，生徒たちは全３回のプログラムを通して進路を見直すきっかけができ，将来を具体的に考えるようになったことがうかがえる。

また，Ｑ３の「自分の考えを積極的に言えた」と，Ｑ５の「仲間と協力して活動できた」については，有意差は認められなかったものの数値の上昇は確認できた。このことから，活動を通して本音と本音の交流や心のふれあいが図られていたことがうかがえる。

第１回目の授業は，ジャガイモを観察することで，それぞれの個性や価値観の違いに気付くことをねらいとして行ったが，生徒たちの視点は，ジャガイモから人間へとしっかりと移行され，個々の考え方の違いを面白いと捉える生徒が多かった。

第２回目の授業は，将来や職業に興味・関心をもつことをねらいとして行ったが，仕事を選ぶ上で大切なことに気付いたり，これまでの職業に対する自分の概念を覆す新しい発見ができたという生徒がいた。

そして，最後の第３回目の授業は，人を選ぶという立場になって意見交換をすることで，将来必要とされる資質や能力に気付き，前向きな生き方をするきっかけづくりをねらいとして行った。生徒たちは，人を選ぶという立場を通して，これから先，自分が選ばれる側になった時に必要なことに気付いたようである。また，現在の自分を振り返るきっかけになった生徒もいて，今回学習したことを踏まえて頑張っていきたいなど，これからの生活に前向きな意見が出ていた。これらの振り返りシートの結果や感想から，授業の効果が十分に図られたことが確認できる。

Ⅴ　研究のまとめ

本研究では，人間関係づくりに重点をおいたSGE を実施することによって，学校生活への適応感とキャリア意識との関連性について検証した。その結果，プログラムの効果として，次のことを確認することができた。

・SGE を用いたプログラムは，キャリア意識尺度の４下位尺度及び学校適応感尺度の４下位尺度の全ての意識の向上につながった。特に，キャリア意識尺度の「人間関係形成」と，学校適応感尺度の「友人関係」において，数値の向上が見られたことは，人間関係づくりに重点をおいたねらいが有効であったと言える。

・キャリア意識が高まったことにより，学校適応感にも意識の向上が見られた。そして，この二つは有意な正の相関を示した。学校適応感尺度の下位尺度ごとに見ると，「学習関係」と「学校全体」の二つにおいて，キャリア意識尺度の４下位尺度との間に比較的強い相関が見られたことから，進路や将来の生き方を考えさせるプログラムの内容が大きく反映していると言える。

・生徒たちは，自他理解が深まり，人間関係が促進されることによって，キャリア意識が高まり，集団への帰属意識とともに所属感が生まれた。そして，自分の存在が集団から認められ，安心してのびのび活動できる居場所があると感じるようになると，学校適応感も向上する可能性が大きいと言える。

Ⅵ　本研究における課題

本研究におけるSGE の実施は，キャリア意識と学校適応感を高めることに効果が認められ，その関連性も明らかになった。しかし，今後学校で実施する場合には，以下の課題が考えられる。

・今回のプログラムは，中学校２年生の２学期で行ったが，行事が立て込み慌ただしさがあった。このように短期間に集中して行う場合は，中学校２年生の３学期や３年生の初めなど，進路を具体的にイメージできる落ち着いた時期が，より効果的だったと考える。

・生徒の発達段階に即した学校生活への適応を考慮して，中学校１年生では「仲間づくり」，２年生では「リーダー育成」，３年生では「将来の生き方や進路」などといった，学年ごとに系統性をもったプログラムの年間指導計画の編成が必要である。

・キャリア教育の本質が，生徒自身が気付き，考え，育っていくことにあるので，その成果を高めるためには，発展性に留意した継続的な活動が有効である。体験活動や学習に加えて，日常生活と結び付いた継続可能な取組を充実させていく必要がある。

・小学校・高等学校との連携を視野に入れながら，12年間を見通した発達段階ごとのキャリア意識の特性と学校適応感との関連を把握する必要がある。学校生活への適応は，中学校だけの問題ではないので，小学校や高等学校との接続時に配慮しながら対応を考えていく必要がある。

＜引用文献＞
中央教育審議会　2011　『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方（答申）』，p.17
文部科学省　2011　『中学校キャリア教育の手引き』，p.23
新見直子　2008　「中学生版キャリア意識尺度の開発」『広島大学大学院教育学研究科紀要第３部57号』，pp.228-230
石田靖彦　2009　「学校適応感尺度の作成と信頼性，妥当性の検討」『愛知教育大学教育実践総合センター紀要第12号』，pp.288-290

＜引用ＵＲＬ＞
文部科学省　2012　「平成22年度　児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」，pp.47-58
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/02/__icsFiles/afieldfile/2012/02/06/1315950_01.pdf（2012.2.7）

＜参考文献＞
片野智治編集代表　2009　『エンカウンターで進路指導が変わる　生き抜くためのあり方生き方教育』　図書文化
河村茂雄編著　2007　『グループ体験によるタイプ別学級育成プログラム中学校編』　図書文化
國分康孝・國分久子総編集　2011　『構成的グループエンカウンター事典』　図書文化
佐藤寿仁・菅原正和　2007　「中学生における学校不適応と信頼感に関する研究」『岩手大学教育学部付属教育実践総合センター研究紀要第６号』，pp.207-216
徳岡大・山縣麻央・淡野将太・新見直子・前田健一　2010　「小学生のキャリア意識と適応感の関連」『広島大学心理学研究第10号』，pp.111-119
文部科学省　2006　『小学校・中学校・高等学校キャリア教育推進の手引－児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために－』，pp.35-40
文部科学省　2008　『中学校学習指導要領解説　特別活動編（平成20年９月）』，pp.25-57
文部科学省　2010　『小学校キャリア教育の手引き』，pp.17-18
吉澤克彦編著　2010　『中学校学級づくり構成的グループエンカウンターエクササイズ50選』　明治図書

＜参考ＵＲＬ＞
中央教育審議会　2008　「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」，p.15
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/news/20080117.pdf(2011.5.11)
本田千惠他　2005　「生徒指導・教育相談体制の推進の在り方に関する研究Ⅰ」－不登校の未然防止・早期対応に向けた意識調査の分析と考察を通して－
http://www.hiroshima-c.ed.jp/web/publish/ki/pdf1/kk32/4.pdf（2011.9.14）
本田千惠他　2006　「生徒指導・教育相談体制の推進の在り方に関する研究Ⅱ」－不登校の未然防止・早期対応に向けた意識調査の分析と考察を通して－
http://www.hiroshima-c.ed.jp/web/publish/kenkyukiyou/sodan.pdf（2011.9.14）
文部科学省　1992　「学校不適応対策調査研究協力者会議報告」（概要）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/06042105/001/001.htm(2011.5.11)
文部科学省　2001　「不登校に関する実態調査」
http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/t20010912001/t20010912001.html（2011.5.11）